

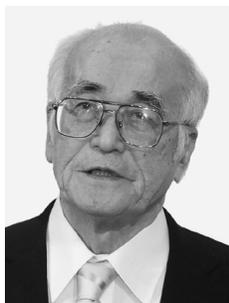
第一〇〇回日本学士院受賞者略歴

恩賜
日本学士院賞

受賞者

表

あきら
章



専攻学科目 日本中世文学

生年 昭和二年 四月

略歴 昭和二年 三月

同 二八年 七月

同 三一年 四月

同 三七年 四月

同 四一年 四月

同 六一年 四月

同 六一年 四月

平成 七年 三月

同 一〇年 四月

東京文理科大学文学科卒業

法政大学文学部助手

法政大学文学部講師

法政大学文学部助教授

法政大学文学部教授（平成一〇年三月まで）

法政大学文学部長（昭和六三年三月まで）

法政大学能楽研究所長（平成五年三月まで、平成七年四月から平成一〇年三月まで）

博士（文学）

法政大学名誉教授

博士(文学)表 章氏の「能楽史の研究」 に対する授賞審査要旨

表 章氏は日本中世文学、とくに能楽の研究者として、これまでも数々の学問的成果を上げてきたが、その近年の業績としては『大和猿楽史参究』(平成一七年三月、岩波書店)及び『観世流史参究』(平成二〇年二月、檜書店)がある。

『大和猿楽史参究』は三部から構成されるが、「Ⅲ」の諸論は内容的に『観世流史参究』と重なる点が多いので、「Ⅰ」「Ⅱ」について見る。

「Ⅰ」を構成する二論文のうち「多武峰の猿楽」は、奈良県桜井市の多武峰談山神社において、世阿弥による能楽の大成以前から近世初期まで演じられながら、関係史料の湮滅などのために実態の明らかでなかった多武峰猿楽に照明を当てた論考である。神事として行われた多武峰八講猿楽の「八講」は法華八講にもとづく呼称とする旧説は誤りで、維摩八講会を意味するものであることを明らかにしたのに始まって、大和猿楽の役者の義務であったとされる多武峰猿楽への参勤の具体相を跡付けている。その結果、具足能や特殊演出

の「翁」が舞われ、新作能が競演されたこと、「六十六番猿楽」と呼ばれる延年風の行事が正月に行われたらしいことなどが明らかになつた。そして多武峰猿楽は猿楽能大成以前の古態を存するものであつたであろうと推論する。

次に「薪猿楽の変遷」では、同じく大和猿楽四座が参勤を義務づけられていた春日神社・興福寺の薪猿楽の具体的行事を調べ、南北朝以後近世初期までのその変遷の様相を究明する。南北朝には興福寺の西金堂・東金堂で修せられる修二会に付随する行事として演じられていた猿楽は、次第に修二会から独立する傾向を示すに至り、それと共に宗教的性格を弱め、興行としての性格を強めていったこと、両金堂への参勤は室町期の応永年間(一三九四—一四一八)以後は廃絶したことなどが解明される。

「Ⅱ 大和猿楽の「長」の性格の変遷」は、猿楽座における「長」「大夫」「権守」「年預」などと呼ばれる職掌の役割を明らかにし、その作業を通して、従来の能楽史の記述に大きな改変を迫ることになった、極めて注目すべき論考である。大和猿楽には大和四座として知られる結崎・外山・円満井・坂戸の四座があり、従来は観阿弥や世阿弥らの「大夫」がこれらの座の統率者であったと考えられていた。表氏は室町期の「長」「大夫」に関する通説の見直しから出発し、近世・近代に及ぶ、新資料を含む豊富な史料を駆使して、本来

大和四座とは、「長」と呼ばれる一座の長老を統率者とした翁猿楽の集団であって、観阿弥や世阿弥らの「大夫」が統率していた演能集団とは全く別の組織であったという、瞠目すべき結論を導き出している。統率者の芸名によって「観世・宝生・金春・金剛座」と呼ばれた後者の演能集団が、演技面で進化の見られない翁猿楽主体の組織を次第に圧倒し、大和四座の中心的な位置を占めるようになっていったが、その背景には、呪師猿楽の芸を継承した祝禱的な舞である翁猿楽中心の猿楽から「衆人快楽」を追求する猿楽能へという、猿楽の質的变化が看取されるとする。厳密な資料研究と能楽史全般を見渡す広い視野に基づき展開される本論考は、能楽研究に新境地を拓いた画期的な業績といふべきである。

『観世流史参究』は、能楽五流(いわゆる四座一流)において最も主流の位置を占めるに至った観世流の、南北朝時代から室町・江戸時代を経て近・現代に及ぶ展開を、大夫やその他の役者の伝記調査、演能などの活動の分析を試みることによって、詳細に跡づけたものである。「Ⅰ 観阿弥伝再検」では、観世流の祖観阿弥について、伊賀国出身説、結崎座創立説などの旧説を斥け、大和の山田出身で、以前から存在した結崎座に所属して活動したのであると説き、その作詞・作曲とされてきた曲目すべてについて詳細な検討を加え、新見を提示する。「Ⅱ 室町時代の観世大夫・観世座」では世

阿弥から戦国期の左近元尚までの伝記・事績を述べる。このうち、観世小次郎信光の生年について、『実隆公記』『信光画像賛』『四座役者目録』などの記述の再検討によって、生年を通説よりも一五年引下げて宝徳二年(一四五〇)とすべきこと、それに伴って彼を能「安宅」の作者とする従来の説は成立しがないこと、大鼓役者であった、シテやワキを演じたと見られないことなどを指摘している点は、とくに注目に値する。「Ⅲ 江戸時代の観世大夫・観世座」では、観世宗家文書や勸進能番組を駆使して、豊臣秀吉・徳川家康など権力者と観世座の関係、明治維新の激動期における役者達の動静など、観世座の消長が辿られ、文化史的にも極めて興味深い多くの事実を明らかにする。近世から近代にかけての役者の活動を追尋した「Ⅳ 観世流の家と人」、伝承的な時代から始まって現代に至る、精密を極めた「Ⅵ 「観世」主体の能楽史年表」などにも、調査に徹する氏の態度がよく現われている。

両著書に一貫する表氏の方法は、古記録・関係文書、『風姿花伝』『申楽談儀』など伝書類の深い読みにもとづく。その論の進め方は手堅く、闡明された新知見は従来の能楽史研究に全く新たな視点を導入し、今後の文学史・演劇史はもとより、文化史の研究にも寄与すること多大である。よって、両著書に代表される同氏の能楽史の研究は授賞にふさわしい業績であると認める。